

声こそが命、必要なのは聞く力

北原 みのり

「声の公論化」という言葉を、韓国の女性運動の中で知りました。私たちの声を公論にする。そのためにこそ女性たちの運動はあるということを、性暴力に抗議する運動の中で、性産業に抗議する運動の中で、私は気づかされました。

例えば、1991年に金学順^{キム・ハクスン}さんが「日本軍に『慰安婦』にさせられた」と声を上げられたことで、それまで男たちの癒しであった「慰安婦」が、こちら側からすれば壮絶な性暴力であったことが明らかになりました。それは今や国際社会の「公論」です。ところが残念なことに未だに日本では「慰安婦」問題そのものをなかったこととする声があとを絶ちません。性暴力に徹底的に抗議するという「声」が、私たちの社会では公論化されていないからだと思います。

女性嫌悪がなまなましく根付く社会で、女性たちの「声」はそもそも、とても軽いものとして扱われてきました。公の声は、常に男たちが上から大きな声で決めていくものであり、痛みを訴える声は「感情的」と捨て去られ、#MeTooの声を上げれば「お前が誘ったんだろう」と逆切れされ、それでも諦めなければ「彼女は嘘をついている」と公に声が潰される様子を、私たちは幾度となく目にしてきました。

私は2019年に続いた4件の性犯罪無罪判決をきっかけに、性暴力に抗議するフラワーデモを呼びかけました。それは思いがけず、日本の#MeTooを大きく切り拓く全国のデモに展開していきました。花をもち#WithYou = あなたの声を信じますという声を上げた女性たちとともに、性被害者が自ら語り出したのです。その場に立ち改めて思うのは、私たちの声が今までいかに「聞かれて」こなかったかという現実です。必要なのはこれ以上の声の力ではなく、聞く力なのです。

女性たちはずっとこの理不尽な社会で声を上げてきました。声こそが命です。その声の力を諦めず、社会に聞く力をつけさせ、最も痛む者の声が「公論化」される社会をともに目指しましょう。



PROFILE

きたはらみのり：(有)アジュマ代表。女性のセクシュアルヘルスグッズ「ラブピースクラブ」、シスターフッドの出版社「アジュマブックス」を経営。作家としても著書多数。フラワーデモの呼びかけ人として性暴力抗議運動に携わる。「慰安婦」問題を若者に伝える「希望のたね基金」理事、AV被害者の支援活動「ばっぶす」理事、「慈愛寮」評議員。近刊に『咲ききれなかった花』(イ・ギョンシン著・梁澄子訳・北原みのり解説、アジュマ、2021)。